

# 両生類

## ① 名古屋市における両生類の概況

名古屋市で記録されている移入種以外の両生類は2目6科10種(ヤマアカガエルの生息情報があるが、信憑性が不十分なので加えていない)であるが、ほとんどの種が都市化による環境悪化が原因で生息地や個体数を減らしているといえる。中には個体群が消失してしまい、姿を消してしまった地域も存在する。

両生類は水田に依存する種類が多く、特にカエル類は水田とかなり密接に関わっている。今回の調査で、市境の市域外側にナゴヤダルマガエルやトノサマガエルが生息しているも、市域内側では生息できる環境がなく、生息確認できなかった箇所が幾つも存在した。さらに農作業の方法にも影響を受けることがしばしば起こる。ナゴヤダルマガエルとトノサマガエルは濃尾平野に同所的に生息するが、岐阜県の一部の地域における遺伝的解析の結果から、トノサマガエルとナゴヤダルマガエルの両種共に遺伝子浸透が確認されている。このことは、本来進化過程で生殖隔離がなされていたが、稲作方法の変化やその他の外的環境変化が原因で交雑が時折起こっていると考えられる。名古屋市内のナゴヤダルマガエルとトノサマガエルに関しての遺伝子浸透の研究はなされていないが、今後遺伝的研究により交雑の有無の判定も必要かと思える。

市内には東部に丘陵地が広がっており、これらの場所は両生類にとっても非常に重要な生息域である。しかし、近代化にともない丘陵地が断片化され、個体群の孤立化が起きている。その結果、個体群間での移動が不可能になり、ある個体群が絶滅したとしても他の個体群からの移動ができないため、非常に危機的な状態にある。さらに、カスミサンショウウオでは、各々の個体群で遺伝的な多様性が低下してきている。そのため、市内の個体群間での遺伝子分化が起きていることが解ってきている。

一方今回の調査で、都市中心部である中区にニホンアカガエルが生息していたことが明らかになった。これは文化財として守られてきた名古屋城の外堀に生存していた個体が、人工的に作られたビオトープに産卵したという事例であった。しかし、ビオトープが作られる以前どの場所で世代交代が行われてきたかは記録が無い。

絶滅危惧種以外では、ニホンアマガエルとヌマガエルが生息している。ヌマガエルは水田があるところには必ずといっていいほど生息が確認され、ニホンアマガエルは、定量的なデータは無いが、市街地や住宅地などでもしばしば見かけることがあり、ちょっとした水辺があると繁殖が可能のため、すぐに絶滅することはないと思われる。しかしこれら2種に関しても今後の動向を見守る必要性は十分にある。

## ② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

10種中8種が絶滅危惧と判断され、生息確認されている両生類の80%が絶滅危惧種ということになった。都市部を多く含む市内ならではの結果である。今回の改訂では、ツチガエルが絶滅危惧ⅠB類から絶滅危惧ⅠA類に、アズマヒキガエルがリスト外から絶滅危惧Ⅱ類に変

更された。ツチガエルは非常に局所的にしか生息が確認できていないことからランクアップされた。アズマヒキガエルに関しては市内のいたるところで産卵数が激減し、消失してしまった繁殖集団も幾つか存在する。愛知県や国ではリスト外の種であるツチガエル、アズマヒキガエル、シュレーゲルアオガエル、ニホンアカガエルの4種は、市内では絶滅危惧種という状況である。このことは、一般的に普通種と思われる種類も市内では絶滅が危惧されることを示している。

(執筆者 藤谷武史)

### ③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各両生類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。

#### 【掲載種の解説（両生類）に関する凡例】

##### 【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目及び科の範囲と種の配列は原則として「日本爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2014）に従った。

##### 【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2014）に従った。

##### 【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上の枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」（愛知県，2015）の評価区分、及び「レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生動物- 3 爬虫類・両生類」（環境省，2014）のカテゴリーも併記した。


##### 【選定理由】

対象種が名古屋市版レッドデータブック掲載種とされた理由について記述した。

##### 【形態】

対象種の形態の概要を記述し、写真を掲載した。

##### 【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。対象種の分布状況を現地調査及び文献調査、聞き取り調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。また、移入種と判断された区に関しては  で示した。

##### 【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

##### 【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

##### 【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

##### 【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。DNA データバンク登録してある種についてはアクセス番号を記した。

##### 【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

##### 【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

両生類 <有尾目 サンショウウオ科>

**カスミサンショウウオ** *Hynobius nebulosus* (Temminck et Schlegel, 1838)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

**【選定理由】**

生息地の環境の悪化により、個体数が減少している箇所が多く見られる。また、個体群が孤立化し、遺伝的交流が途絶えており、個体群内の遺伝的多様度も減少している。

**【形態】**

本種は生息地域によって形態が異なる事が知られている。名古屋市の個体群では、繁殖期に観察された成体の全長が 73~112.5mm (藤谷, 2000)。雌の方が大きくなる傾向にある。体色は淡い黒褐色。まれに尾の上縁に明瞭でない黄色い筋がある個体もいる。幼体時や若い個体では白い細かな斑点が入る事もある。卵嚢はバナナ状で、透明度が良くない。



カスミサンショウウオ  
千種区 2010年2月27日 藤谷武史 撮影

**【分布の概要】**

**【市内の分布】**

東部の丘陵地にパッチ状に生息。

**【県内の分布】**

名古屋から知多半島。西三河地方。渥美半島の一部。

**【国内の分布】**

本州の愛知県以西。四国瀬戸内沿岸、九州北部、老岐島、五島列島に分布。

**【世界の分布】**

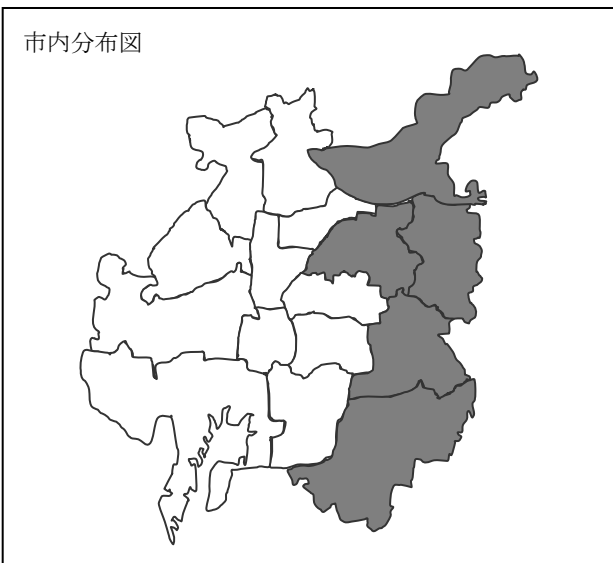
日本固有種。

**【生息地の環境／生態的特性】**

主に平野部の丘陵地に生息する。中国山地では標高 600~1000m に生息する高地型と呼ばれる個体群が知られている。産卵は水たまりや小さな池の淵、水田の用水路や浅い緩やかな流れのある流水域に産卵する。産卵期は 12~4 月で、本地域では 2 月下旬~4 月上旬。産卵数は地域によって大きく異なるが、本地域では 36~111 卵で平均約 70 卵。産卵期は長い、まとまった雨量に起因して産卵が集中する傾向にあり、産卵期間中 3~4 回ほど確認される。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

市内の東部にある丘陵地帯に生息するが、繁殖集団の数は極めて少なく、産卵場所となる水辺の水源が不十分な場所も存在する。また、開発に伴い大量に死亡した例もあることから、今後生息地の環境保全は不可欠である。



市内分布図

**【保全上の留意点】**

生息地の分断化が起こっており遺伝的交流も行われない事から、遺伝的多様度の低下に伴う均衡劣化が懸念される。今後生息域外保全などの検討も必要だと思われる。

**【特記事項】**

2004 年版ではトウキョウサンショウウオとされているが、分類学上本地域個体群はカスミサンショウウオに帰属したため本種名を用いた。DNA データバンク登録: AB972540- AB972601。

**【引用文献】**

藤谷武史, 2000. 名古屋市東山公園におけるトウキョウサンショウウオの調査. 両生類誌, 4:9-12.

**【関連文献】**

Ihara, S., T. Fujitani, 2005. Prey items salamander *Hynobius nebulosus* in Nagoya and its inferred position in the soil food web. *Edaphologia*, 75:7-10.  
大谷勉, 2009. 日本の爬虫両棲類. pp.28-29. 文一総合出版, 東京.  
Matsui, M., K. Nishikawa, S. Tanabe, and Y. Misawa, 2001. Systematic status of *Hynobius tokyoensis* from Aichi Prefecture, Japan: a biochemical survey (Amphibia, Urodela). *Comparative Biochemistry and Physiology*, 130B(2):181-189.

(執筆者 藤谷武史)

両生類 <有尾目 イモリ科>

**アカハライモリ** *Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826)

カテゴリー

**【選定理由】**

生息域が極めて狭く、現在の生息域も健全とはいえず、市内から消失してしまう恐れが著しく懸念される。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	準絶滅危惧

**【形態】**

全長が70~130mmで、雌の方が大きい。背面は黒色か暗褐色。腹部は赤かオレンジの斑紋や不規則な模様がある。繁殖期の雄は尾を中心に婚姻色が現れ、背面に黒い水玉模様が現れることがあり、尾が垂直方向に肥大する。遺伝的や形態的に地域変異があり、腹部の模様や大きさに違いがある。背面に赤いストライプのはいる個体も存在する。

**【分布の概要】**

**【市内の分布】**

東部の丘陵地の極限られた地域にのみ生息。

**【県内の分布】**

尾張丘陵部、三河丘陵部から山地。知多半島。県レッドリストでは、渥美種族とそれ以外を中間種族に分け、渥美種族はCRにランクされる。

**【国内の分布】**

本州、四国、九州、佐渡島、隠岐島、壱岐島、五島列島、大隈諸島など。

**【世界の分布】**

日本固有種。

**【生息地の環境／生態的特性】**

池、湿地、水田などの水中で多く見られる。山間部などの林道脇の水たまりや河川などでも観察される。繁殖期の雄は、地域で多少異なるが、尾を雌の顔の前でくねらせながら震わせ求愛する。その際、雄はソデフリンといわれるホルモンを放出し、雌を誘発させることが知られている。産卵は水中に一卵ずつ水草などに巻きつける。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

市内東部の丘陵地の極限られた場所でのみ生息する。以前は東部丘陵に広く分布していた可能性がある。

**【保全上の留意点】**

生息する湿地の環境を維持する。生息数の少なさから、生息地保全と並行して生息域外保全の検討も必要である。

**【特記事項】**

遺伝的にも変異があることから、個体群としての維持は非常に重要だと思われる。

**【関連文献】**

内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎, 2002. 決定版 日本の両生爬虫類, pp.56-59. 平凡社, 東京.  
林 光武, 1993. ダンスを踊って求愛 アカハライモリ. 両生類・爬虫類1 アシナシイモリ、サンショウウオ 週刊朝日百科動物たちの地球, (97):20-22. 朝日新聞社, 東京.



アカハライモリ  
千種区、2014年3月2日、藤谷武史 撮影



市内分布図

両生類

(執筆者 藤谷武史)



両生類 <無尾目 アカガエル科>

**ツチガエル** *Glandirana rugosa* (Temminck et Schlegel, 1838)

カテゴリー

**【選定理由】**

生息場所が極めて少なく、市内の生息環境も本種にとって十分とは言えない。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

**【形態】**

体表にはイボ状の突起が多く存在し、ヌメヌメしていない。頭胴長は 37～53mm で雌の方が大きい。捕獲すると悪臭を放つ。「イボガエル」とも呼ばれる。

**【分布の概要】**

**【市内の分布】**

北区の一部にのみ分布。ただし中区白川公園に人為移入と思われる繁殖集団が存在する。

**【県内の分布】**

尾張東部、三河地方、知多半島、渥美半島に局所的に分布するが、濃尾平野にはあまり生息しない。

**【国内の分布】**

本州、四国、九州、佐渡島、隠岐島、壱岐島、五島列島など。北海道西部と伊豆大島は人為移入。

**【世界の分布】**

朝鮮半島、中国東北部。

**【生息地の環境／生態的特性】**

平地から低山地に生息し、水田、池、沼、用水路、湿地、広い河川の河原の水たまりやゆるい流れのある淵などで産卵する。繁殖期は長く、5～9月。名古屋市内では、6月頃に繁殖する。幼生は普通一度越冬する

**【現在の生息状況／減少の要因】**

北区に限られた場所に生息する。水田の減少や乾田化が原因で幼生の越冬場所が確保されないため、衰退していると思われる。

**【保全上の留意点】**

生息場所の水田や周りの用水路などの持続。稲作の農薬散布の軽減に留意が必要。

**【特記事項】**

染色体の形態が異なる4つのグループが存在し、ZW型とXY型の性決定様式が同種内で存在する。中部地方はXY型(Ogata 2002)。

**【引用文献】**

Ogata, M., JY. Lee, S. Kim, H. Ohtani, K. Sekiya, T. Igarashi, Y. Hasegawa, Y. Ichikawa and I. Miura, 2002. The prototype of sex chromosomes found in Korean populations of *Rana rugosa*. *Cytogenetic and Genome Research*, 99:185-193.

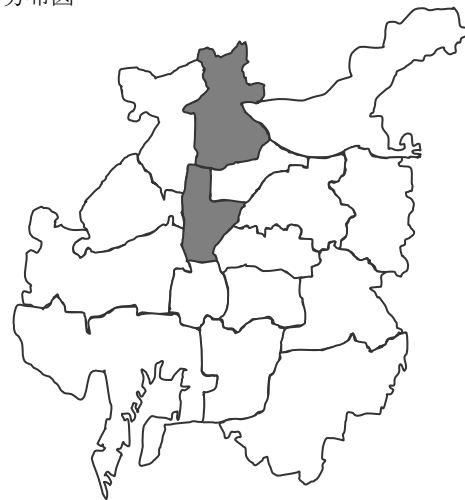
**【関連文献】**

愛知県, 1996. 愛知県の両生類・爬虫類, p.117. 愛知県.  
 島田知彦・坂部あい, 2014. 知多半島におけるツチガエルの生息地の一例. 豊橋市自然史博物館研報, (24):33-35.  
 前田憲男・松井正文, 1999. ツチガエル. 改訂版日本のカエル図鑑, pp.96-99. 文一総合出版. 東京.



ツチガエル  
 北区、2014年10月3日、藤谷武史 撮影

市内分布図



(執筆者 藤谷武史)

両生類 <無尾目 アカガエル科>

## ナゴヤダルマガエル *Pelophylax porosus brevipodus* (Ito, 1941)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

### 【選定理由】

濃尾平野には全国に比べて比較的多く生息するが、市内では生息できる水田の減少が原因で、極く限られた生息地しか存在しない。“ナゴヤ”の地名を持つカエルにも関わらず、遠からず絶えてしまう恐れがある。

### 【形態】

頭胴長が35～73mmで、雌の方が大きい。形態や体色はトノサマガエルと類似するが、背中に背中線を持たない個体が多いことや、後肢がトノサマガエルに比べてやや短く体が丸みを帯びてずんぐりしているのが本種の特徴。その他、黒い斑紋が丸く独立していることが多く、雌雄の体色による二型は殆ど認められない。

### 【分布の概要】

#### 【市内の分布】

南西部の水田地帯及び北部の一部。

#### 【県内の分布】

尾張地方、西三河地方、知多半島、渥美半島。

#### 【国内の分布】

長野県伊那谷、東海地方、近畿地方中部、山陽地方東部、四国香川。名古屋集団と岡山集団とに大きく分かれ、遺伝的にも差が見られる。

#### 【世界の分布】

日本固有種。

### 【生息地の環境／生態的特性】

低地の水田の周りが本来の生息域で、その他、湿地や沼などの周りにも生息し、水辺からあまり離れることはない。産卵期間は長く、4～7月におよび、一繁殖集団でも期間が長い。雌は一年に2回産卵することがある。産卵は少数の卵を何回かに分けて行う。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

南部の生息地では水田地帯が広がり比較的多くの個体が存在するが、北部の生息地は水田が住宅街と混在しているため、悪影響を受けやすい。水田の減少が最大の減少理由である。

### 【保全上の留意点】

水田の開発は大きく本種の個体群に影響を及ぼすことから、稲作圃場の継続が重要。

### 【特記事項】

トノサマガエルとの自然交雑が懸念されている。守山区で本種が確認されたとの情報があるが、トノサマガエルの誤認の可能性が高い。

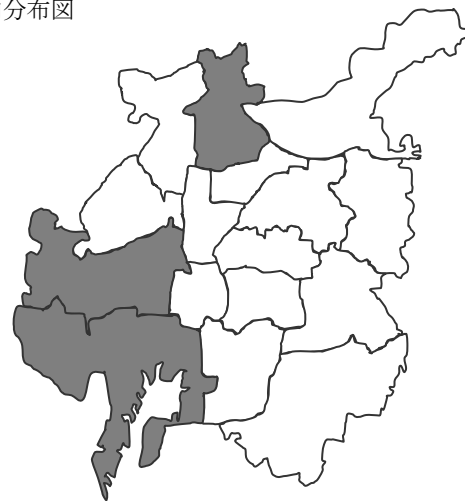
### 【関連文献】

- 長井悠佳里・土井敏男・湯浅義明・藤谷武史・伊藤邦夫・小泉雄紀・三浦郁夫, 2011. ナゴヤダルマガエルの遺伝的地域分化—とくに岡山集団とナゴヤ集団が接する境界領域について—. 爬虫両棲類学会報, 2011(1):55. 日本爬虫両棲類学会第49回大会発表要旨.
- 前田憲男・松井正文, 1999. ダルマガエル. 改訂版日本カエル図鑑, pp.92-95. 文一総合出版, 東京.
- 松井正文, 2003. 野生動物の保全遺伝学 14 両生類. 小池裕子・松井正文(編), 保全遺伝学, pp.214-226. 東京大学出版会, 東京.
- 光田佳代・原直之・高木雅紀・山崎裕治・宮川修一・岩澤淳, 2011. PCRと制限酵素を利用したトノサマガエルとナゴヤダルマガエルの母親系統の簡易な判別法. 両生類誌, (21):17-22.



ナゴヤダルマガエル  
北区、2014年10月3日、藤谷武史 撮影

市内分布図



(執筆者 藤谷武史)

両生類 <無尾目 アオガエル科>

**シュレーゲルアオガエル** *Rhacophorus schlegelii* (Gunther, 1858)

カテゴリー

**【選定理由】**

市内では過去の記録が少ないが、東部に局所的に生息していたとみられる。しかし、現在では開発による影響で生息確認が皆無に等しい状況となっている。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

**【形態】**

頭胴長は 32~53mm で、雌の方が極めて大きい。体表は平滑で、黄緑色から緑色であるが、体色変化で暗褐色にもなる。時折背面に黄色い斑点模様が現れる個体も存在する。吸盤が発達し、ニホンアマガエルと似ているが、本種は鼻から頭側面にかけて黒い条線が入らない。

**【分布の概要】**

**【市内の分布】**

東部の丘陵地のごく一部に生息。しかし、近年は確認されていない。

**【県内の分布】**

尾張東部、三河地方、知多半島の一部、渥美半島。

**【国内の分布】**

本州、四国、九州、五島列島。

**【世界の分布】**

日本固有種。



シュレーゲルアオガエル  
岐阜県恵那郡、2007年6月26日、藤谷武史 撮影

**【生息地の環境／生態的特性】**

平野部から低山地帯では水田周辺に、標高1600m までの高地では主に湿地周辺に生息。産卵は 4~6 月が主な時期で、雄が水田の畦などに浅い窪みを作り、その中に泡状の卵塊を産卵する。雄は隠れて鳴くことが多く、繁殖期でも鳴き声が聞かれるものの、姿を確認する事は容易ではない。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

名東区の市境の緑地にのみ生息。しかし、ここ数年間は生息確認ができていない。本種は濃尾平野ではほとんど見ることができないが、田植え時期が遅く、産卵期に水田に水が溜まっていない状態となり、個体群維持が出来ないためと推測される。

**【保全上の留意点】**

生息地である水田や周りの水路の確保が重要で、且つ産卵期に合わせた水の確保。

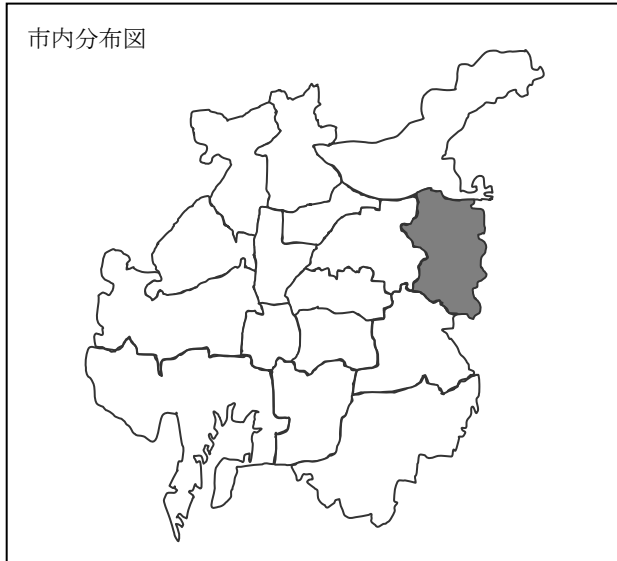
**【特記事項】**

かつては、名東区の東境から長久手市にかけて生息していた。しかし近年の開発に伴い、名古屋市に隣接する長久手市内の生息地は消失した。

**【関連文献】**

愛知県, 1996. 愛知県の両生類・爬虫類, p.117. 愛知県.  
大谷 勉, 2009. 日本の爬虫両棲類. pp.116-117. 文一総合出版, 東京.  
島田知彦・坂部あい, 2014. 西三河平野部におけるツチガエルの分布. 豊橋自然史博物館研報, (24):7-15.  
前田憲男・松井正文, 1999. シュレーゲルアオガエル. 改訂版日本カエル図鑑, pp.158-161. 文一総合出版, 東京.

市内分布図



(執筆者 藤谷武史)



両生類 &lt;無尾目 アカガエル科&gt;

**ニホンアカガエル** *Rana japonica* Boulenger, 1879**【選定理由】**

開発などによる生息地の縮小や生息地の環境悪化に伴い個体数が減少している。

## カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

**【形態】**

頭胴長が 34～64mm で、雌の方が明らかに大きい。体色は赤褐色や灰褐色で、背面はほぼなめらかである。背側線は明瞭でほとんどおれ曲がらず、ヤマアカガエルと異なる。幼生は背面に一对の黒点があり、これもヤマアカガエルと異なる。雄は鳴嚢を持たない。

**【分布の概要】****【市内の分布】**

東部丘陵地の一部。中区の一部。

**【県内の分布】**

尾張地方、三河地方、知多半島、渥美半島。

**【国内の分布】**

本州、四国、九州、隠岐、大隈諸島。八丈島に人為分布。

**【世界の分布】**

日本固有種。



ニホンアカガエル  
滋賀県産、藤谷武史 撮影

**【生息地の環境／生態的特性】**

主に平地の水田や丘陵地に生息し、山地では少ない。繁殖期は普通1～3月、市内では2月下旬～3月上旬である。ヤマアカガエルと同所的に生息する場所もあるが、市内では本種しか確認していない。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

丘陵地の限られた場所のみに生息する。繁殖集団の個体数変動が激しく、生息地の環境が影響している可能性が考えられる。現在は減少傾向にあり、産卵数が激減している個体群も見受けられる。

**【保全上の留意点】**

丘陵地に依存しているため、丘陵地の環境保全を含めた永続的な保護が重要である。

**【特記事項】**

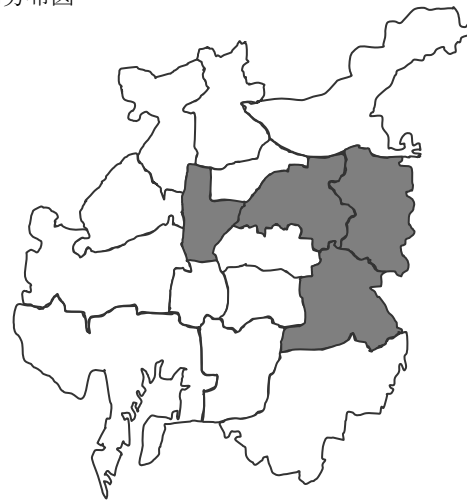
中区に生息している個体群は、丸の内中学校に作られたビオトープに 2001 年より産卵する集団。この集団は名古屋城の外堀に生息していた集団と考えられる。

**【関連文献】**

比婆科学教育振興会, 1996. 広島県の両生・爬虫類, p.163. 中国新聞社, 広島.  
前田憲男・松井正文, 1999. ダルマガエル. 改訂版日本カエル図鑑, pp.92-95. 文一総合出版, 東京.

(執筆者 藤谷武史)

市内分布図



両生類 <無尾目 ヒキガエル科>

**アズマヒキガエル** *Bufo japonicus formosus* Boulenger, 1883

カテゴリー

**【選定理由】**

10年ほど前までは市内でも丘陵地を中心に多く生息しており、産卵シーズンになると多くの「ガマ合戦」が見られていた。しかし近年、市内各地で産卵数が激減している。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

**【形態】**

頭胴長は43～162mmと変異が大きい。多くの個体は70～130mm。小さな個体は東北地方と中部地方の山岳部などで見られる。背面は茶褐色、黄褐色、赤褐色とバリエーションがあり、腹部側面には白や黒、茶褐色のまだら模様が入る。オスは繁殖期になると体表が滑らかになり、黄褐色がより強くなる傾向がある。

**【分布の概要】**

**【市内の分布】**

主に東部の丘陵地に生息。公園や庭先などでも見られる。中区白川公園に人為分布。

**【県内の分布】**

尾張東部、三河地方、知多半島、渥美半島に広く分布。

**【国内の分布】**

本州近畿及び山陰以北。北海道と佐渡島及び伊豆大島は人為移入。

**【世界の分布】**

日本固有種。

**【生息地の環境／生態的特性】**

平野部の丘陵地や畑、公園。山地の森林や溪流沿いにも生息。繁殖期は2～7月だが、平野部は2～3月に産卵されるのが一般的。通常成体は産卵後に一か月ほど春眠する。産卵数は1500～8000個で、紐状の卵塊を産卵する。幼生は30mmほどで変態する。変態後の幼体は成長が早く、オスで一年後の秋に性成熟し、メスではその一年後に性成熟をする。市内では通常3月中旬頃に産卵する。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

丘陵地を中心に生息するが、近年急激に個体数が減少しており、産卵が見られなくなった場所も数か所存在する。中区の白川公園に生息する繁殖個体群は、近くで飼育繁殖した個体が逃げ出し、定着した個体群である。

**【保全上の留意点】**

市内の個体群が激減した理由は不明だが、今後各繁殖集団の個体群動態を観察する必要がある。生息地である丘陵地などの開発にも注意が必要である。

**【特記事項】**

白川公園に定着している繁殖集団は、平和公園の個体群であることが明らかとなっている。平和公園及び猪高緑地の個体群は、ここ数年産卵が確認されなくなった。

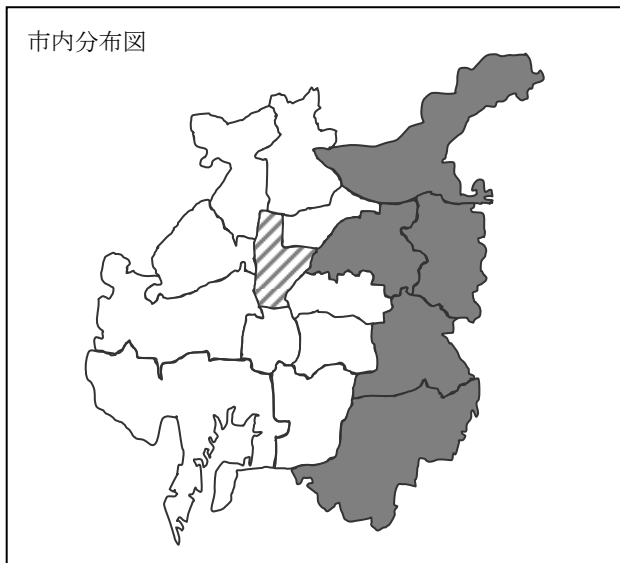
**【関連文献】**

松橋利光・奥山風太郎, 2002. アズマヒキガエル. 山溪ハンディ図鑑 日本のカエル+サンショウウオ, pp.28-39. 山と溪谷社, 東京  
 前田憲男・松井正文, 1999. アズマヒキガエル. 改訂版日本カエル図鑑, pp.18-21. 文一総合出版, 東京.  
 浦野明央 石原勝敏 編, 1987. ヒキガエルの生物学. 289 p. 裳華房, 東京.

(執筆者 藤谷武史)



アズマヒキガエル  
千種区、2007年3月1日、藤谷武史 撮影



両生類 <無尾目 アカガエル科>

**トノサマガエル** *Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell, 1861)

**【選定理由】**

都市化による水田の減少や、繁殖可能な湿地などの減少によって、個体群に影響が出ていると思われる。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

**【形態】**

頭胴長が 38~94mm で、雌の方が大きくなる。背中には背中線を持ち、体色は緑や暗褐色、黒い不規則な斑紋がある。成熟した雌は、黒い斑紋が広がり、黒い部分が目立ち、繁殖期の成熟した雄は、時に鮮やかな黄褐色になり、黒い斑紋がほとんど無い個体も見受けられる。雄は一对の外鳴囊が鼓膜の下方でたまたみ込まれている。



トノサマガエル  
中川区、2014年9月16日、藤谷武史 撮影

**【分布の概要】**

**【市内の分布】**

東部と西部、及び北部の水田や緑地に生息。

**【県内の分布】**

尾張地方、三河地方、知多半島、渥美半島のほぼ全域。

**【国内の分布】**

本州（関東地方から仙台平野を除く）、四国、九州、五島列島。北海道は人為分布。

**【世界の分布】**

朝鮮半島、中国、ロシア沿海州。

**【生息地の環境／生態的特性】**

生息地は平野部から低山地に及び、主に水田が大きな繁殖場所であるが、河川敷の水たまりや小さな池などでも産卵する。繁殖期は4~6月だが、一繁殖集団による繁殖ピークは非常に短く、一週間ほどでほぼ終了する。雄は繁殖期に1.6m<sup>2</sup>ほどの縄張りを持つことが知られている。非繁殖期は水辺から離れる。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

主に水田に依存しているが、生息や繁殖のできる水田の減少が原因と思われる。中川区や中村区の西部では、残された水田で比較的多くの本種を確認することができる。

**【保全上の留意点】**

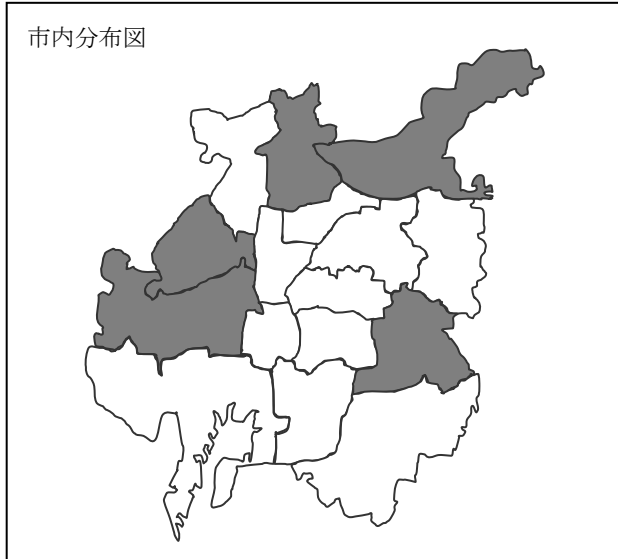
水田の開発は大きく本種の個体群に影響を及ぼすことから、稲作圃場の継続が重要。

**【特記事項】**

ダルマガエルとの自然交雑が懸念されている。

**【関連文献】**

前田憲男・松井正文, 1999. トノサマガエル. 改訂版日本カエル図鑑, pp.84-87. 文一総合出版, 東京.  
松井正文, 2003. 野生動物の保全遺伝学 14 両生類. 小池裕子・松井正文(編), 保全遺伝学, pp.214-226. 東京大学出版会, 東京.



両生類

(執筆者 藤谷武史)

